

◆読み物

リレー選手になって

1-3 ○○○○

体育祭でクラス対抗リレーの選手を決める話し合いで、僕は選手に推薦されました。他に推薦されたのは、A君、B君、C君、D君、E君の5人。男子の選手枠は4人です。「6人の名前があがりましたが、この中でクラスのためにがんばろうという人は積極的に手をあげてください」と議長が言いました。僕は体育祭の翌日、陸上の新人戦県大会を控えていました。大役であるリレー選手の候補として名前が挙がったことはうれしかったのですが、A君もB君もC君もD君もE君も、運動部に所属していて、結構足が速いのです。

なので、「僕が出なくてもリレーは勝てるだろうし、僕以外の4人が選手になってくれないかな……」「次の日が新人戦だから、前日の体育祭は全力を出したくないな」という気持ちもありました。でも、もしクラスがリレーで負けたら……監督に「自分の試合の調整のことだけ考えて、クラスの一員としての体育祭は放棄したのか!？」と叱られそうな気がして、えいっ！と手をあげ、僕はリレーの選手になりました。しかも、アンカーで。

体育祭当日になっても、僕は翌日の新人戦のことばかり考えていました。リレーの選手は入場門に並ぶようアナウンスがあったとき、席を立つと、クラスみんなが拍手で僕を見送ってくれました。そのとき、僕は自分のことしか考えていなかった自分が少し恥ずかしくなって、「とにかく、一生懸命走ろう」と思いました。

A君から2着でバトンをもらい、クラスみんなが応援している前を走りました。トップを走っていた2組の選手をゴール前で抜いて1着でゴールしたとき、テントから歓声が聞こえてきました。テントに戻ると、みんながまた拍手で迎えてくれ、「かっこよかったよ!」「さすが陸上部!」「ありがとう!」と次々に言葉をかけられました。

僕はただ一生懸命走っただけなのに、こんなにみんなが喜んでくれたことにびっくりしました。そして、そんなみんなの様子を見て、僕もうれしくなって、「走ってよかったな」と思いました。自分の新人戦のことばかり考えて全力を出さず適当に走っていたら、多分みんなをがっかりさせたと思います。

翌日の新人戦で、疲れていたにもかかわらずいいタイムが出せたのは、そんないい経験をしたからだと思います。足が速いことは僕の自慢だけど、そのことで人を喜ばせる経験ができるなんて、思ってもみませんでした。本当にリレーの選手になってよかったな、と思います。